

第 215 回 史跡散策の会

姫嶋神社／田蓑神社と淀屋橋近辺神社巡り

開催日：令和 8 年 9 月 16 日（水）

行程：阪神姫島駅(10:00)～姫嶋神社(10:15)～姫島駅→千船駅～田蓑神社(12:00)～千船駅の町中華にて昼食→阪神梅田駅～地下鉄淀屋橋駅～適塾(14:10)～御霊神社(14:30)～北御堂(14:50)～南御堂(15:00)～難波神社(15:15)～地下鉄本町→地下鉄梅田駅～ミュンヘン曽根崎店にて暑気払い(16:00～18:10)

参加者：加納 岩井 松村 高 野口 水野 横山 国沢 崎谷 葛野（敬称略）

暑気払いからの参加者： 森田 小林 木村勤 宮本 吉田 生嶋（敬称略）

天候：雨のち曇り

毎年恒例のミュンヘンビアホールでの暑気払い前に、「史跡散策の会」を雨天決行しました。行先は大阪市西淀川区と中央区の神社巡りです。一行はまず阪神電鉄の姫島駅に集合し、曇り空の中を西に歩いて行きました。境内にはホタテの貝殻が絵馬代わりになっている棚がありました。江戸時代は 80 カ所程の島が大阪湾に点在したらしく、姫島もその一つです。参拝後また阪神電車にて、千船駅についた時点では、雨は本降りになりました。



< 姫島神社 >



<帆立の絵馬>

国道2号線を横切って、田蓑神社に向かいます。昔工場だったと思われるマンションの前を神崎川沿いに東へ歩いていきました、雨水の流れる道路で、足を置く場所を探しながらの行軍でした。



<田蓑神社>

現在の田蓑神社は西淀川区佃町1丁目にあります。江戸時代にこの佃地区の漁師たちが徳川家康との縁から、江戸に移住し東京の佃町となったとの事です。勿論佃煮は言うまでもありません。千船駅に戻り町中華店で昼食となりました。ほっとして皆さん好きなものを注文、若干フライングしてビールをいただく方もおりました。

その後阪神電鉄で梅田駅まで行き、地下鉄で淀屋橋駅で下車、昔大阪支店があった勧銀

ビルの変貌ぶりに懐かしさを感じて、地上に出て適塾に向かいました。この頃にやっと雨が小降りになって、皆さんより元気になった様な気がしました。



<適塾>

一行は御堂筋を渡って、西へ移動して御霊神社に到着しました。都会のビル中の神社は結構目立ちます。



<御霊神社>



<先祖かな??>

その後御堂筋を南下して、通称「北御堂」に到着。正式名は本願寺津村別院（浄土真宗本願寺派西本願寺）です。巨大な本堂は、周辺のビルにも引けを取らないスケールで、右に親鸞聖人、左に蓮如上人の大きな銅像が控えておられます。



<北御堂>

また南下して、旧伊藤忠商事ビルを通過して通称「南御堂」に到着。正式名は真宗大谷派難波別院です。北御堂と比較すると大きさでは見劣りしますが、入口門の建物がユニークで、東急エクセルホテルになっております。



<南御堂>

最後の難波神社に到着した頃には、すっかり雨も止んで、ゆっくりと境内の中で記念撮影をいたしました。



<難波神社>



<難波神社で記念撮影>

若干気温が低い日でしたので、ミュンヘン曽根崎店でのビアパーティは、ジョッキを空ける数も増えないまま、名物の唐揚げや蛸のカルパッチョ・サラダ・ウインナー・ポテトと少々油っこい食物を、15,000 歩いたエネルギーを補填するために頬張りました。なお水野支部長から会員の近況報告と今後の支部予定の紹介があり、最後に加納大先輩からの締め挨拶をいただきして、閉会となりました。



<加納さんの締め>



<暑気払いビアパーティー 16 名>

文責／写真 葛野

以下は散策の会コンダクターの解説書です。

姫嶋神社

「姫」という字があてられているがもとは「比売島」だったとする。

姫島には女神を祀る神社が鎮座している。「姫嶋神社」である。

「やりなおし」にご利益があるとされる。祭神は阿迦留姫命。「古事記」の応神記には、「むかし、新羅の王子、天之日矛（アメノヒボコ）の妻となったアカルヒメは、常に美しい食事を用意して夫に仕えた。だが、アメノヒボコはなにかにつけて妻をののしる。とうとうアカルヒメの堪忍袋の緒が切れ、「わたしはあなたの妻となるべき女ではありません。私の先祖の国へ帰ります。」と言い残して難波に帰ってきた」とある。

帰ってきたとはいえ、祖国に知人や縁者がいるわけでもない。それでもアカルヒメは新たな地で再起し、女性たちに機織りや裁縫、焼き物や楽器などを教え、病気に苦しむ人には治療を施していった。

夫の DV から逃れるために新しい土地に渡り、そこで見事に再起を果たす。このことからアカルヒメは「決断と行動の神様」として信仰され、また何もない状態からスタートを

切ったことから「やりなおしの神様」として崇められるようになった。

鳥居をくぐって参道を進むとホタテの貝殻らしきものが集められてオブジェのように形作られている。姫嶋神社ではこの貝殻を絵馬としている。帆を立てて進む船のような形で泳ぐのが「帆立貝」という名の由来である。そのホタテを絵馬にすることで、奉納した人の新しいスタートが順風満帆に進むようにという願いが込められている。

田蓑神社

大阪にありながら、徳川家康と関係の深い場所もある。西淀川区の佃だ。地名に島は付かないが、かつては田蓑島（たみののしま）と呼ばれていた。名付け親ともされる家康だが、1586年（天正14）に多田神社に参詣する際、この地の漁民が渡船を務めたため、その恩賞として全国での漁業権と税の免除を認めたという。このとき、家康は田も作るよう命じたことから地名を佃に改めたとする。

家康が江戸に入る際には、佃村の住人33人と田蓑島神社の宮司らも江戸へ向かった。その後、住民らは鉄砲洲を拝領し、大阪と同じ佃と名付け、住吉四社大神と家康を祀り、住吉神社を創建した。これが東京の佃の始まり。大阪の佃に鎮座する田蓑神社には家康を祀る東照宮があり「佃漁民ゆかりの地の石碑」ある。そのほかにも、大阪で「島」の付くところは、かつて本当に島だったと考えて間違いはない。但し、桜島は島は由来ではなく此花区のHPでは地域内に築かれた桜堤の「桜」と、実業家で当地の埋め立て権者であった島徳蔵の姓「島」を合成したものと説明している。ちなみに、現在海に面している都道府県の中で自然の島が存在しないのは大阪府だけとなっている。

淀屋橋近辺神社巡り

<御霊神社>

当社は圓江（つぶらえ：現在の靱）にあった圓神祠（つぶらしんし）が創起で、850年（嘉祥3年）の「文徳実録」に八十嶋祭の祭場が圓江で行われたとあり、800年代後半の創建とされる。文禄3年（1594年）に、石州津和野藩主亀井侯が邸宅を割いて寄進し、圓江から現在地の北船場に移され、寛文年中に御霊神社と改称された。商業金融の超新地の鎮守として商家の崇敬はもとより、山片蟠桃、緒方洪庵、福沢諭吉を始め、懷徳堂や適塾の塾生もよく参拝したとのことである。

1926年（大正15年）に境内の浄瑠璃文楽座が出火し、本殿に類焼。1930年（昭和5年）に再建されたが、1945年（昭和20年）の空襲により、全て炎上した。現在の社殿は1957年（昭和32年）の再興。

祭神は天照大神荒魂、津布良彦神、津布良媛神、応神天皇、源正霊神の5柱を祀る。

この内、津布良彦神、津布良媛神は旧摂津国津村郷の産土神であり、源正霊神（鎌倉権五郎景政）は亀井候が邸宅内に祀っていたのを合祀した。

鎌倉権五郎景政は平安後期、源義家に仕えた武将で「後三年の役」で活躍した。

全国にある御霊神社の多くで祭神として祀られており、御霊神社の成り立ちに大いに関係しているようである。

境内に1884年（明治17年）から人形浄瑠璃「御霊文楽座」があった。文楽200年の歴史の中でも最も華やかな時代であったといわれ、大阪人の社交や商談の場として大いに繁盛したが、1926年（大正15年）に出火で焼失した。

<坐摩神社>※今回は訪問せず

当社は「摂津国一の宮」として、生井神（いくいのかみ）・綱長井神（つながいのかみ）・波比岐神（はひきのかみ）・阿須波神（あすはのかみ）の五柱を祭神として祀る。この五柱を総称して、坐摩神（いかすりのかみ）というとのことであるが、通称は「ざまさん」で通っている。

当社は神功皇后が新羅より帰還の折、淀川南岸の大江、田蓑島の渡辺の地（現在当社の行宮がある中央区石町付近：天満橋の西方）に奉祀されたのを始まりとする。

1582年（天正10年）豊臣秀吉の大阪城築城に当たり、替地を命じられ、寛永年間（1624年～44年）に現在地に移転している。現在の坐摩神社の旧地名を渡辺町というのも元の地名も併せて移したものであり、全国の渡辺・渡部姓の発祥の地とされている。（現在は久太郎町4丁目・渡辺3号という形で渡辺の地名はかろうじて残されている）

平安時代の「延喜式」には、摂津国西成郡（今の大阪城より西方一帯）の唯一の大社と記され、産土神として現在に至っている。

「坐摩（いかすり）」の語源として諸説あるらしいが、神社は、土地または居住地を守るという意味の「居所知（いかしり）」が転じたとの説を採っている。

御堂筋から入ると、大小三つの鳥居が横に合わせた「三門形式」の鳥居がある。

1936年（昭和11年）官幣中社に列せられた際に造営された社殿は先の大戦の空襲で焼失。現在の社殿は1959年（昭和34年）に鉄筋コンクリート造りで、戦前の姿のままに再建された。

境内の東側には、境内末社（相殿神社、天満宮、大国主神社、繊維神社、大江神社）が並んで祀られている。

境内の西側（裏門から入ったところ）にある境内末社の「稲荷神社」の左側には陶器神社がある。

境内末社「火防陶器神社」

この神社は戦前は北は筋違橋から南は四ツ橋迄の両側に二百数十店もの陶器店が軒を並べ、戦後は西横堀川に再建された陶器問屋の守護神といわれ、当初は西区靉南通り一丁目にあったが、1907年（明治40年）市電敷接の道路拡張のため、現在地に移設された。

<難波神社>

当社の縁起は、5世紀の初め、反正天皇が河内国丹比柴籬宮（たじひのしばがきのみや：現松原市上田）に遷都を行ったとき、同地に父仁徳天皇を偲んで創建されたのが始まりで、仁徳天皇、素戔鳴尊（すさのおのみこと）、倉稻魂尊（うがのみたまのみこと）を祀る。

943年（天慶6年）には摂津平野郷（現天王寺区）に遷座。

現在の地には、1583年（天正11年）豊臣秀吉が大阪城を築く際に、移転させられた。当地は上難波村といわれ、当社は「上難波神社」又は「仁徳天皇社」と称していたが、1875年（明治8年）「難波神社」と、改められた。

なお、天正期の建物は、1666年（寛文6年）火災により、神宝や神輿とともに焼失している。その後も本殿は度々火災や、御堂筋の工事の際に建て替えられているが近年では昭和20年の大空襲のときに鳥居と玉垣を残し全焼、戦後再建された。

鳥居は神社の四方に建っている。現在の本殿は、先の大戦の空襲で全焼し、1948年（昭和23年）より仮宮によっていたものを、1974年（昭和49年）に再建された。

境内の西側には稲荷神社があり、船場の商家を中心に進行を集め、近年においても「博労（ばくろ）町のおいなりさん」として親しまれている。

境内にある大きなくすの木は大阪市の保存樹1号に指定されている。

植村文楽座が1811年（文化8年）に当社境内に人形浄瑠璃の小屋を開いた。明治の初め、文楽軒が九条の新開地に移った址に「彦六坐」が開かれ、御霊神社の境内に移った「文楽座」と張り合った。

以上